

平成26年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成26年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成27年3月4日(水) 18時00分～19時50分
場所	宇治市役所 6階 602会議室
出席者	<p>(委員) 榊原会長 薮副会長 鬼界委員 奥村委員 田邊委員 松井委員 伊家委員 大越委員 肥川委員</p> <p>(事務局) 石田教育長 中村教育部長 畑下教育部次長 松崎教育部次長 上道学校教育課長 市橋一貫教育課総括指導主事 海老瀬一貫教育課総括指導主事 野口一貫教育課特別支援教育係長 信太一貫教育課指導主事 姫野一貫教育課指導主事 赤野一貫教育課指導主事</p> <p>(小中一貫教育チーフコーディネーター) 天花寺大久保小学校教諭 平岡宇治中学校教諭 葛山宇治小学校教諭</p>
配付資料	<p>平成26年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 平成26年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書 平成26年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書(概要版)</p>
<p>1 開会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・石田教育長 開会挨拶</li> <li>・小中一貫教育チーフコーディネーター紹介</li> </ul> <p>2 報告及び協議事項</p> <p>(1) 報告1 平成26年度宇治市小中一貫教育取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局より資料(1～2頁)に沿って全体報告</li> <li>・宇治ひろの学園より取組報告</li> <li>・宇治中学校ブロックより取組報告</li> <li>・宇治黄檗学園より取組報告</li> </ul> <p>(委員)</p> <p>これまでの小中一貫教育における取組を見せていただく中で、中学校の先生方が小学校の先生方の指導法を参考にされている場面を見たことがある。そのような場面を見ると小中一貫教育が定着してきた事を感じる。あわせて小・小連携についても進んできたことを感じる。</p> <p>また、やはり宇治黄檗学園の話の何うと同じ施設内で小・中学生が学ぶ良さを感じる。</p> <p>一方、分散進学のある小学校では中学校からのプリントを配るにあたっては配慮が必要であり小中一貫教育を進めるにあたってのネックであると感じる。</p> <p>(委員)</p> <p>私が関わらせていただいている宇治ひろの学園では分散進学がないので、大変スムーズに関わらせていただいている。本日の報告を聞かせていただき分散進学を実感したところである。</p> <p>これまでになかった児童生徒交流について、中学生が小学校へ出向いての取組や東宇治中学校での半日入学を実際に見せていただき、異年齢交流がとてもよい取組であると感じた。</p>	

(2) 報告2 平成26年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート結果について  
資料「平成26年度宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書」(概要版)に沿って事務局より説明

(委員)

分散進学における比較があったが、分散進学のある小学校ではPTA本部役員内においても明確に中学校担当が分かれていると聞いたこともある。保護者の意識の中でも進学する中学校と進学しない中学校を明確に分けており、影響を受けているのではないだろうか。

(会長)

たいへん難しい問題ではあるが、分散進学解消への方向性について事務局で答えられることがあればお聞かせ願いたい。

(事務局)

分散進学が学校や地域社会にご迷惑をおかけしている状況であることは痛感している。小学校区というものはコミュニティ形成の基盤であり、校区の位置づけは地域にとってたいへん重要なものである。学校の容量のみで分割するような簡単なものではなく、教育効果や学校の施設容量を考えながら校区の再編を進めていかなければならない。どこに軸足を置くかが決めにくい状況である。

しかしながら、アンケート結果からは分散進学のある学校においても子どもたちには分散進学があるからと言って不安の要素を持たせていない事が結果として出ており、学校のがんばりがここに現れていると考えている。

校区再編については中長期的な課題として取り組む必要があると考えている。

(委員)

評価の段差をどのように解消するかについて、本校での様子やこれまでの経験を踏まえてお話をしたい、

中学校に入学して生徒が一番大きな不安を抱くのは定期テストである。小学校は单元ごとに指導終了時にテストを行いそれに基づいて評価を行なっている。いわゆる指導終了時の学力を見るものである。中学校では教員自らが作問した定期テストで一定の定着を見て評価を行なっている。中学校の先生方の作問能力はたいへん見事なものである。顧みて小学校の先生方は教えることについてはたいへん長けているが自ら作問したテストで評価することは少ない。本校ではこれまでの3年間においてこの段差をなくすために取り組んできたが、現実にはまだまだ乗り越えるまでには至っていない。

できれば小学校の教員が自らの指導について自らが作問したテストで評価を行うことを中期(小学校5、6年生から)から実施したい。指導終了後の評価ではなく、一定の定着を見る定期テスト的な評価をするというスロープをつける。この取組がアンケートに見られる学習の進め方やテストに対する不安についての手立てとなり得るのではないかと考える。

評価の段差をどう解消していくかが学力充実に向けた次の取組のポイントになるのではないかと考える。

(事務局)

継続的・系統的学習指導は本市小中一貫教育のねらいのひとつであり、これまでも取り組みにおいて成果を上げてきていると感じてきたところである。一方でデータに現れているとおり大変難しい課題であることも再確認された。

現在、取り組まれているブロック内での授業研究等の取組が学習の進め方やテストに関する不安を軽減していくものにつながっていくと考えている。

(委員)

教員免許法を基本とした、小学校の学級担任制と中学校の教科担任制の違いが大きなものである。小学校の教員がどこまで教科を追究するのが良いかについては正直なところわからない。

国による小中一貫教育の制度化が進められるようであるが、この違いはひとつのネックとなるのではないだろうか。

(委員)

現場の実態からは確かに小学校の教員が自ら作問したテストで評価が出来ないのは教科担当制でないことが大きな理由である。小学校ではそれぞれの担任が指導している教科を一人の教員がその学年を対象としたテストを作成するのは難しいところである。

(委員)

中学校に於いても同一学年を複数の教員が指導するということがあるわけだが、確かに学習の内容、進度、評価等で打合せの時間の確保に苦慮している状況である。

(委員)

評価の段差解消というのは大きな課題である。

### (3) 報告3 平成26年度宇治市小中一貫教育推進協議会活動について

#### ①全体会・学校視察概要

資料(P13)に沿って事務局より説明

#### ②委員による中学校ブロック取組視察の感想

(委員)

宇治中学校ブロックの取組を視察した。地域行事「ふるさと宇治21」における部活動体験では中学生が創意工夫をして小学生を迎えていた。実にホスピタリティあふれるおもてなしで、共に喜びを表現しながら体験活動が実施されており、異年齢の交流が確実になされていることに感心した。

本市小中一貫教育の取組以前から宇治中学校ブロックでは地域との結びつきがあるように説明を受けたが、そこには学校を愛する地域の方々の思いが表れていた。

課題としては分散進学があるわけだが、お手伝いをされていたPTAの方々の中には実際には宇治中学校に進学しないお子さんの保護者の方も役員さんとしてお手伝いをされており、宇治中学校では役員としての勤めを果たされておられた。この先も学校を支えてくださるかは不安な面もあり、是非とも分散進学については解消の方向で努めていただきたい。宇治市においては校区をさわらずして小中一貫校を開校した経過、事例があるわけで、創意工夫をしていたらと思う。

(委員)

槇島中学校ブロックを視察した。槇島小学校での授業研究会で算数、国語、外国語活動の三つの授業を参観した。

授業システムで取り入れている「まとめカード」や「めあてカード」が使用されていたが、以前に参観した槇島中学校や北槇島中学校での授業でも使用されており、ブロック内小・中学校で同じ授業スタイルが確立されていることを確認した。

分科会では小・中学校の先生方がすごく自然にお話をされていたのが印象的であった。そして小学校の先生方が如何に中学校に送り出していこうかということに力を入れていることがよくわかった。私は小学校の入学式も中学校の卒業式にも参加させていただいているが、その様子を見ると先生方はたいへん重い9年間を背負っていただいていると感じる。

これまでの取組の成果であるが、今では中学校の定期テストなど、小・中学校それぞれが互いに何をしているかを知っている。これは保護者に於いても同様に合同で会議を開催し交流している。児童生徒の挨拶運動等がとても自然に行われており、やらなければならないではなくとても自然に取組が行われていることを感じる。

授業研究会では中学校の先生が小学校の先生の指導を見て、いいところを取り入れるという姿勢が見られて、たいへん大事なことであると感じた

分散進学については、学校を改修するとき地域を変えずしてひとつの中学校に通えるようにしていただければありがたい。

(委員)

東宇治中学校ブロックを視察した。普段見ることのないブロック、あわせて小・中学生が共に活動をしているところを見たいと言うことで中学校半日入学に決めた。

生徒会が全て運営していることがよくわかり、中学生のお兄さん、お姉さんぶりが見えた。事務局と一緒に参観したので、参観しながら疑問点を質問することが出来たので効率的であった。音楽の授業ではさすがに中学校の先生の指導はすばらしく、最初は小さな声だったのが最後にはすばらしい合唱になっていた。部活動体験では小学生が希望する部活動に参加し、中学生に指導を受けていたが、その指導がさすがだなと感じた。6年生達が目を輝かせて参加している様子がほほえましく、また、指導している中学生にはたくましさを感じられた。半日入学のような取組は大変よいものであると感じた。

また、学校の様々な取組の様子が掲示板で紹介されており、その中に生後何ヶ月かの赤ちゃんを連れた親御さんと中学生が交流する取組があった。いくつかの中学校で取り組んでおられるようであるが、今後も増えていくことがよいと思う。

(委員)

宇治黄檗学園を参観した。学園会、いわゆる児童会、生徒会役員選挙の立会演説会を見せていただいた。選挙には5年生から参加するとのことであったが、本部役員は7年生以上で構成されるとのことであった。小学生の時から中学生の活動を見ることによる効果なのか、小学生がとても落ち着いていて参加していたことが印象的であった。施設一体型ということで私自身もすごく興味があり、一度参観したいと考えていたが、子どもたちの様子からは9年間を通して、同じ施設で学ぶということの良さやまとまりが強く感じられた。

児童・生徒の交流を充実させる一方で、小学校、中学校だけの行事もあるとのことで、目的に応じてうまく使い分けられていると感じた。

学校施設が新しく、充実していることが子どもたちの学習への意欲と大きく関わっていることが感じられた。当初は9年生と1年生の体格差がある事に対して不安を感じたが、実際に見せていただくと年齢差がある中での交流がとても大事であることがわかった。

保護者目線からは、小学校から中学校へは不安なく進学するが高校進学時にこれまでの中1ギャップが高1ギャップとして現れないかとの不安があったが、実際に参観した中では子どもたちはたいへんよい形で成長していると感じた。

(委員)

本市小中一貫教育が3年を経て、次をどのように展開するかについておそらく教育委員会についても検討しているところであろうが、私たち校長も考えていくべきところである。

この間、10中学校ブロックがそれぞれ特色ある取組を進めていくことの重要性をこの場でも意見として述べてきたが、本日の資料を拝見する中で、小中一貫教育を進める中で最低限やらなければならないことはほぼすべての中学校でも出来てきたのではないかと思う。それに加えてそれぞれの中学校ブロックの特色も見えてきたように思う。

その点を前提に来年度以降どのようにするか、いわゆる特色をさらに伸ばすというやり方と他ブロックのよい点を取り入れ、いわゆる平準化を図るという考え方がある。

次の一手として、どのような方針を立てるかについては教育委員会においても十分に検討して示していただきたい。我々校長会も真剣に検討し、戦略的に考えていきたい。

(委員)

南宇治中学校ブロックを参観した。半日入学を参観したが、以前は説明を聞き、部活動を見学して終わりと言うことが多かった。

授業体験を企画したのは宇治中学校が一番最初ではなかったかと思うが、南宇治中学校での取組はどのようなものかという思いで見せていただいた。驚いたことは、「始まる時間が早いこと」であった。小学生は給食を食べた後に歩いて中学校にやってくるが、宇治中学校では地理的な条件から、時間もかかるし、もちろん解散も早くしなければならない。内容も限られた時間で実施をしなければならないので、宇治中学校では授業は1コマしかできないけれども南宇治中学校では2コマ実施できている。地理的条件の違いを感じた。授業内容につ

いては中学生を対象とした内容を小学生にわかりやすく説明していたように感じた。

(委員)

西小倉中学校の小中合同授業研究会を参観した。1、2年生全クラスの授業が公開され、その後に分科会が行われた。自らも教員であるので、授業研究会そのものは目新しいものではなかったが、その中で感心したことは、小・中学校教員の壁が取り払われていたことであった。分科会の中で、小学校の校長先生がかなり率直に授業に対する意見を述べられており、かなり厳しい意見もあったが、貴重な意見交換の場になっていたことを感じた。

教員の中では小中一貫教育を進めていく中で学力を高めたいという思いがある。何を指標にするかなど難しい問題もあるが、京都府学力診断テストにおいては宇治市はわずかながら京都府平均に及ばないところがあり、その点についても熱心に議論が行われていた。

(委員)

難しい課題があるわけだが、保護者の立場としては、学力も上げつつ、人間関係も良好に、校区も乗り越えてみんなが仲良くできることを目指してほしいと思う。

(事務局)

分散進学について様々なご意見をいただいたが、それだけこの問題については皆様の期待が大きいことを痛感している。教育委員会に於いても手をこまねいているわけではなく次のステップとして教育委員会で十分に調整を行い地域へ出向いて行きたいと考える。ただ、全市的に校区再編の問題を解決するには難しいこともあるので地域を絞りながら進めていくことも必要かと考える。

次の小中一貫教育の展開については平成27年度までは現行の延長線上で取り組んでいき、平成28年度からはある意味でバージョンアップの必要性があると考え、協議しているところである。今後の小中一貫教育で目指すところについては部長以下で十分に検討していきたい。

学力と結びつけて表現していく必要性は感じるころであるが、学力のみならず、人間関係など幅広く把握していくことは重要なことであり、本日紹介いただいた各中学校ブロックの取組に示されたように、本市小中一貫教育は一定の成果が上がっていると考えているところである。これをいしずえに次の小中一貫教育をどう展開するかを考えていかねばならないと考える。

(委員)

昨年度のチーフコーディネーターの先生が異動されると聞き、当初は不安であったが、いざ始まると、全く心配することはなく、スムーズに取組が進められている。

(委員)

異動されたチーフコーディネーターの先生の新しいブロックでの体験を聞かせていただくのもよいかもしれない。ブロックによる違いがあるのならばお聞かせいただければと思う。

(委員)

新聞報道では国が小中一貫教育の制度化を検討しているとされているが、その動きを受け、宇治市はどのような影響を受けるのか、ある意味では不安である。現状等で聞かせていただきたい。

(事務局)

昨年12月に中教審答申により、小中一貫教育の制度化への方向性が示された。計画では平成27年度に法制化され、早ければ平成28年度に新たな制度として小中一貫教育がスタートすると聞いている。

制度化については各市区町村の考えに基づいて活用できるものであり、全ての小中学校が一律に新たな制度になるものでも、また、特定の学校を国が指定するといったものではない。

内容として、指導内容の学年の前倒し、先送りが可能になるなどが示されているがあくまでも概要である。宇治市としては小中一貫教育に先行的に取り組んできた経過があり、今後の国の動きを注視し具体的な対応について検討していかねばならないと考えている。

(会長)

地域社会との連携を考えると小中一貫教育の枠内の方がやりやすくなるのではないかと考える。学校に負担をかけることにもなるわけだが、小中一貫教育であるからつながるとい

うメリットを活かした中での地域連携、人的資源の活用、開発について考えられないか？

(事務局)

小学校を単位とした地域社会では小学校間での違いが生じるが、中学校を起点として、複数の小学校の地域社会がひとつにまとまることが進んでいると感じている。ひとつの例として、南宇治中学校ブロックでは分散進学を抱えて居らず、地域資源を活用した取組が可能かと考える。

(会長)

学校に負担をかけることになるのだが、地域がつながる起点としての中学校の在り方、小中一貫教育の取組が進むことを期待したい。

### ③ 27年度に向けて

事務局より説明

(委員)

校長会を代表してだが、全面実施より3年を経て、ここまでの進展を得られたのはとりわけ教育委員会による人的支援である市費負担教員をブロック毎に配置をいただいた事がこの取組の成功裏に必要不可欠であったと考える。是非とも学校現場への支援を引き続きお願いしたい。

(委員)

小・中の連携が進んでいるのを強く感じる場所であるが、小学校間の連携はどのようなものなのか。小・小連携の取組を進めているとの報告があったが、やはり、小学校で足並みをそろえて中学校に送り出すことは大切であると思う。地域とも連携してということになると難しさも増すわけだが、その中で中学校が中心となりつつ、まとまってくればよい。やはり小・小連携は重要であると思う。

(会長)

小・小間の連携、交流についての具体例についてはどのようなものか？

(事務局)

様々な形で小・小連携を行っているところであるが、最も多いのは教員間での合同研修になる。

違った形の一例としては平盛小学校教員による西大久保小学校での帰国児童生徒理解学習がある。中学進学時に必要な理解学習を小学校時に実施している例である。

(小中一貫教育チーフコーディネーター)

ブロックの合同研修会の中で小・小交流を実施している。例えば授業内でのルールやめあての掲示方法などを共通して行い、中学校へつなげていく取組を進めている。

(委員)

宇治中学校区では当時の文部省の研究指定を受けたことを契機に古くから小中連携の取組を進めてきている。その中では育友会・PTAの部会もあり、地域行事では各地域団体と共に行事を実施している。

(副会長)

全面実施より3年を経過し、想定していた課題が浮き彫りになってきている一方、その課題を克服する為の改善、取組が進められているように思う。

大きな方向性に変わりなく、進んでいくべきであると考えますが、そこには教育委員会、学校、地域社会が有機的につながって行ってこそはじめてよりよき成果が上るとこの会議を通じてあらためて感じた。

## 3 閉会

・中村教育部長より閉会の挨拶